三重県剣道連盟
とこわか国体だより
第４号
令和３年９月

三重国体中止決定！

断腸の思い

平素は、各支部や会員の皆様には、剣道連盟の運営、業務に御理解と御支援をいただいておりますことをお礼申し上げます。

「第76回国民体育大会三重とこわか国体」の開催について、新型コロナウイルスの感染拡大等により、知事は県民の命を守るため断腸の思いで中止要請するという苦渋の決断をされ、その後、正式に中止が決定しました。

剣道連盟といたしましては、国体開催に向けて準備委員会を発足し、その後、実行委員会に移行し、大会準備や選手強化に長年にわたり取り組んでまいりました。しかし、大会まで約1か月後に迫った8月26日に中止が決定し、誠に残念でなりません。

選手・指導者に三重武道館に集合して頂き、皆さんに国体の中止を申し上げた際は、選手や指導者は涙する者もあり、悔しさを滲ませての中止説明となりました。

国体の開催が決定してから、会員の皆様方には、国体運営や予算確保等、各種施策に対しまして御理解と御支援をいただきましたことに感謝し、厚く御礼申し上げます。

今後の対応につきましては、三重県と競技団体で検討してまいりますが、本年の国体につきましては残念ながら中止となります。

会員の皆様には、今後とも剣道連盟に対しまして御支援を賜りますようお願い申し上げ、国体中止の報告と致します。

三重県剣道連盟
会長　岡　田　一　義

発行：三重県剣道連盟

（事務局）
〒514-0007
三重県津市大谷町152
大谷ハイム1－202号
Tel:059-226-5975
Fax:059-229-7407

三重とこわか国体
強化練習報告【成年男女】

強化副部長　西　尚正

熊本武道館にて

とこわか国体に向けた成年男女の強化練習の様子については、「とこわか国体だより」第３号で報告したとおりです。これまで剣道の強化練習に必要な対外試合（練習試合）がコロナ禍において全くできていませんでしたが、７月17日～18日福岡県、22日～25日熊本県、鹿児島県に遠征しました。近隣の県等の参加もあり福岡県、佐賀県、熊本県、鹿児島県、栃木県と練習試合ができました。

三重県は男女とも各ポジション２名の２チームで男子10名、女子６名の選手で臨みました。九州のチームは、剣道レベルの高い県ばかりですが、特に昨年度国体開催予定が令和５年に延期した鹿児島県、今回、関東から参加した次年度開催県の栃木県は、ともに国体に向けての強化が図られています。

これらのチームに、男女とも素晴らしい試合を展開し、一人ひとりの試合内容から強化練習の成果が見て取れました。試合前には濵田和義総監督から「積極的に試合を行い、これまで稽古で積み重ねてきた技を発揮して死にものぐるいで試合をすること」との指導を受けて、選手が果敢に試合をした結果です。

これまで強化練習で船津アドバイザーの「足の作りから技の習得へ」という厳しい稽古で培った動き負けない脚力や相手に攻めこむ技が随所に見られました。

都道府県対抗
女子剣道優勝大会結果

監督　西　尚正

７月10日（土）ジェイテクトアリーナ奈良において第13回全日本都道府県対抗女子剣道優勝大会が開催されました。

昨年度の第12回大会は中止になりましたので２年ぶりの大会です。三重県は次のような布陣で出場しました。

先鋒　加藤　里佳（鈴鹿高校）
次鋒　斉藤　さち（朝日大学）
中堅　乗田　美紀（鈴鹿支部）
副将　北林　奈津子（度会支部）
大将　西村　真美（度会支部）

各選手とも厳しい三重県予選を勝ち抜いた優秀な選手であるとともに、本年三重県で開催の国体に向けて強化稽古に取り組んできた選手です。さらに、６月から本大会に向けて自主的に４回の合同稽古を行い、実力・気力とも充実して試合に臨みました。

１回戦は、石川県に３（５）対０（１）、２回戦は、群馬県に３（７）対０（１）と快勝しました。３回戦は、奈良県と対戦しましたが、２（４）対２（５）の本数差で惜敗しました。

各選手とも日頃の稽古そのままに積極的に攻め、勢いのある試合でしたが、わずかの差で涙をのみました。表彰式では２勝１引分けの好成績を残した斉藤選手が優秀選手賞として表彰されました。

インターハイで
三重県勢大活躍！

三重県高体連剣道専門部
専門委員長　大川　慶

去る8月9日～12日、石川県「いしかわ総合スポーツセンター」において、第68回全国高等学校剣道大会が開催されました。

三重とこわか国体に向けての強化の成果を発揮する舞台で、本県からの出場者は素晴らしい結果を残していただきました。

長谷川選手の諸手突きが決まる

優勝した長谷川選手

女子個人戦、四日市工業高校の長谷川凜選手は、しっかりとした構えから積極的に技を出し、準決勝まで6試合中4試合が2本勝ちという素晴らしい内容で決勝まで勝ち上がりました。特に4回戦で1本1本からの思い切った相面、準々決勝での諸手突きは、今大会の中でも突出した素晴らしい技でした。決勝戦は、全中個人優勝の強豪選手を相手に15分近い長い試合になりましたが、前に前に出る剣道で相手を圧倒し、最後は引き胴を決めて、見事に優勝という快挙を達成しました。

女子団体戦、鈴鹿高校は、予選が日吉ヶ丘高校（京都）、島原高校（長崎）と全国の強豪校が同リーグに入る厳しい組み合わせでしたが、初戦5引き分けの後の2戦目、島原高校との試合は、中堅加藤選手の奪った1本を全員が粘り強い試合運びで守り切り勝利、予選リーグを突破しました。

決勝トーナメント1回戦、明石高校（兵庫）との試合は、2対2の接戦で代表戦になりましたが、加藤選手が初太刀で小手を決めて勝利。準々決勝、高松商業高校（香川）は、次鋒の伊藤選手が奪った小手をみんなで守り切って競り勝ち。準決勝は、本大会で優勝した中村学園女子高校（福岡）を相手に全員で取りに行った結果の0対1での敗退となりましたが、見事に3位入賞を果たしました。

男子団体戦、三重高校は、予選リーグを4対0、3対1と力の差を見せつける圧勝で乗り切り、決勝トーナメント1回戦で、本大会2連覇中の王者、九州学院高校（熊本）と対戦しました。先鋒宮崎選手の2本勝ちでリードした試合展開となりましたが、相手の厳しい攻めに必死に耐えながら最後まで粘ったものの、逆転負けでベスト16入賞という結果となりました。ただ、最終的に優勝をしてインターハイ3連覇となった九州学院高校が唯一最後までリードを許すことになった三重高校の健闘は、周りから称賛される素晴らしいものでした。

6月に開催された東海総体に引き続き、選手たちは長年の強化の成果を発揮し、素晴らしい成績を残してくれました。

3位入賞の鈴鹿高校の選手のみなさん

第56回国民体育大会（宮城大会）に出場して

玉置　亮

【大会結果】

平成13（２００１）年10月16日・17日の２日間、宮城県の河北町総合センターにおいて、第56回国民体育大会剣道競技成年男子の部が開催されました。

本県からは県予選会で勝ち上がった、（先鋒）西村　勝敏・（次鋒）浜口　浩伸・（中堅）玉置　亮・（副将）長谷川　恵一・（大将）岡田　一義が出場しました。（※敬称略）

本県は２回戦で、翌年の地元開催県である高知県に完勝した山形県と対戦しました。先鋒・次鋒共に１本先取するも逆転負けし後がなくなりましたが、中堅以降３人が連勝し３対２で勝利しました。３回戦では強豪神奈川県に辛勝した長崎県と対戦しました。次鋒・中堅・大将がいずれも接戦の末延長戦を制し、３対２で勝利しました。準々決勝は優勝候補の東京都と対戦し、中堅までで敗れはしましたがチーム全体としては一進一退の試合内容でした。本県は平成６（１９９４）年以来７年振りの５位入賞を獲得することができました。決勝は東京都と地元宮城県との対戦で大将戦の末、宮城県が優勝しました。

【大会を通じて経験したこと】

その当時の私は、県の代表として全国大会に出場することが目標で、全国の舞台で勝ち上がることなど考えてもいませんでした。

大会出場選手

元々地力不足のうえ全国規模の大会での経験も乏しく、さらに慢性化した足の故障もあり、７月石川県での国体錬成会では案の定散々な結果となりました。このまでは岡田先生をはじめチームの皆さんに迷惑がかかると思い、怪我の再発に注意しながら、仕事の合間の少しの時間でも有効活用するように心掛けました。毎日の生活の中で、たとえ10分でも時間があれば、面を着ける、一人稽古をする、ランニングをする、といった内容です。この年の本県出場選手は職種も様々でしたので、皆さんそれぞれが稽古時間の捻出に苦労されていたことと思います。

大会期間中練習会場で、大将の岡田先生（現剣道連盟会長）が副将の長谷川先生（現理事長）と、基本稽古を黙々と繰り返し行っておられました。また同じ会場内では、現三重国体アドバイザーの船津先生擁する大阪府チームが基本稽古をされており、打突の強さやスピード・気迫等、迫力の違いに圧倒されました。私は大学を卒業して以来地稽古中心の練習が多くなっていましたので、繰り返し基本稽古をすることの大切さを教えていただきました。

大きな大会や強い対戦相手と勝負する時ほど、自分の心に四戒が生じます。練習不足や調子が悪い時には、弱気の虫も出てきます。勝負に勝つには自分自身に克たなければなりません。大会当日、私は対戦相手を恐れず自分の力を出し切ることに専念するようにしました。チームとしても、５人で気持ちをつなげて一進一退の中、すべて

大将戦での決着でした。試合はどんなに強い対戦相手でも心の持ちようによって必ずチャンスがあることや、チームで心を一つにして戦うことの重要性を学ばせていただきました。

【追記】

大会後20年が経ちますが、「宮城国体会」と称して毎年出場メンバーとその家族が集まり、稽古会と懇親会を行っています。稽古会は真剣そのもので、皆さん益々剣道に磨きがかかっておられます。また、岡田先生の奥様をはじめ家族同士交流できることが毎年の楽しみとなっています。

会場となった河北町総合センターは北上川の下流域に位置し、平成23（２０１１）年の東日本大震災ではこの地域周辺も甚大な被害に遭われました。児童と教職員84名が犠牲にあった大川小学校はこの会場近くにあり、４年前に訪問させていただく機会がありました。解体せず震災遺構としてそのまま保存された校舎を目の当たりにし、自然災害の無常さと、この世に生きる者の責任を痛感させられました。

幼少の頃、体が弱く父の勧めで始めた剣道ですが、これまでたくさんの先生方にご指導いただき今の自分があります。そしてその多くの先生方が鬼籍に入られました。先人を敬い、この世に生を受け健康であり、そして家族の協力や人とのつながりがあって剣道ができていることに感謝し、日々の稽古に取り組んでいるところです。

国体開催準備に携わって

三重県剣道連盟
理事長　長谷川恵一

平成23年11月、三重県・三重県教育委員会・三重県体育協会（現「三重県スポーツ協会」）が連名で、文部科学省・日本体育協会（現「日本スポーツ協会」）に、平成33年に三重県での国体開催の要望書を提出しました。

当時、私は三重県剣道連盟（以下「三剣連」という。）の強化部会長という立場でしたので、国体に向けて三剣連の選手強化をどうしていけば良いかを考えなければいけないと思い「三重県剣道連盟剣道一貫強化体制（案）～平成30年インターハイ、平成33年国民体育大会を目指して～」という資料を作成しました。それを、平成24年３月の理事会・評議員会において説明し、それから現在まで、国体開催に向けての準備に何らかの形で携わらせて頂きました。

残念ながら、三重とこわか国体は中止となりましたが、国体の開催準備に携わらせて頂く中で、沢山の方にお世話になりました。その感謝の気持ちをこめて、三剣連の国体開催に向けての取組みを報告させて頂きます。

【準備組織】

平成27年「三重国体準備委員会」が設置され、平成28年1月の日本体育協会、全日本剣道連盟（以下「全剣連」という。）の会場視察の対応や、国体視察、各県からの情報収集を行いながら、強化・運営・資金の各担当で準備に取り組みました。

その後、令和元年7月に、「三重国体準備委員会」から「三重とこわか国体実行員会」に移行し、強化部・競技部・総務部の３つの部で準備に取り組みました。以下、各部の取組みについて説明いたします。

①　強化部

選手強化につきましては、平成25年から強化指導員の体制を強化し、それまで無かった中学生・高校生の強化指定選手を選出し、平成26年には小学生の強化指定選手も加え強化活動を開始しました。

また、平成27年には、山村強化部会長が、強化指導員の研修会用に研修資料と共に三剣連における小学生から一般までの剣道一貫強化プログラムを作成しました。その後、毎年の強化指導員の研修会時には修正を加えながら、充実した研修会資料となっていきました。

高校生の強化につきましては、高体連の強化部にお願いしていましたが、一般の強化につきましては、ブロック稽古会や各種大会に向けての強化練習（遠征・合宿含む）等、従来からの強化練習を継続

選手・強化スタッフ（国体中止説明後の記念撮影）

しながら、国体強化合宿等徐々に強化活動を増やしていきました。県内における定期強化練習を平成29年から月1～2回、平成30年からは月2回にし、遠征等も徐々に増やしていきました。また、従前から行っていた東海四県による国体強化錬成会を、平成30年から国体開催までは毎年三重県で行うことにしました。

平成29年からは選手強化のアドバイザーとして大阪の船津晋治先生を招聘し、船津先生のご指導の下での強化練習となりました。

（船津先生のご指導に関しては、とこわか国体だより第1号、第3号の強化活動の報告をご参照ください。）

こうした小学生から一般までの一貫した強化活動により、平成30年8月のインターハイでは、男子団体で三重高校がベスト8，平成31年4月の全日本都道府県対抗剣道優勝大会で初優勝しました。さらに、その年の国体東海ブロック大会で、成年女子が8年ぶりの優勝、そして、茨城国体では、成年男子が宮城国体以来18年ぶりの5位入賞を果たしました。

こうして、着々と成果を上げ、国体総合優勝への道を突き進む予定でしたが、令和2年2月頃から、新型コロナウイルスが日本中を襲い、各種大会はすべて中止、残念ながらその年の鹿児島国体も中止になりました。そして、国体強化活動も中止せざるを得なくなりました。

全剣連は、コロナ禍における剣道の活動を再開するため、令和2年6月に「対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」を作成し、それに基づき、強化練習も徐々に再開していきました。しかし、選手強化という面では、全剣連ガイドラインの「出稽古禁止」という内容が妨げになり、県外への遠征ができませんでした。これまで、県内で基礎能力を向上させる稽古を積み上げ、これから国体に向け練習試合で試合勘を養っていく時期に練習試合ができないことは非常につらい状況でした。

そこで、全剣連に相談し、コロナ対策を確実に行い、県外へ遠征することで了解を得ました。

しかし、遠征には相手が必要ですが、コロナ禍において遠征を受け入れてくれる県がありません。そこで、三重県の翌年の開催県である栃木県の剣道連盟と話をし、ホテルでの対応・交通手段等、多面にわたるコロナ対策を実施して、成年女子の錬成会が12月に実現しました。その後も、栃木県剣道連盟には、成年男子も含め大変お世話になりました。

もう一つコロナで大きな打撃を受けたのは、警察官が剣道をできない状況となったことです。茨城国体の5位入賞メンバー5名の内4名は警察官でした。警察官が剣道をできるようになる状況が見えない中で、しかたなく、警察官抜きで選手候補を再編し強化に取り組みました。新しく選ばれた選手候補の約半分は、それまでの強化指定選手ではありませんでしたが、新しく選ばれた選手候補の皆さんは、他の選手候補と共に国体に向けて死に物狂いで稽古に取り組んでくれ、稽古の成果も少しずつ見えてきました。

令和3年に入ってもコロナ感染の状況は良くならず、3月にリハーサル大会として予定していた東海四県対抗剣道大会も中止を余儀なくされました。しかし、県外遠征は、少年男女、成年男女とも積極的に行い、他県との練習試合の結果をみても、国体での総合優勝を勝ち取るだけの力を付けてきたと実感していました。

そして、令和3年8月のインターハイでは、四日市工業高校の長谷川凛選手が女子個人で優勝し、女子団体でも鈴鹿高校が3位に

入賞、男子団体も三重高校が予選リーグを上がり決勝トーナメントで優勝した九州学院高校に惜敗するという結果を残しました。

こうした、強化活動の縁の下の力持ちとなったのが、事務局の濱崎花子さんでした。濱崎さんは、遠征の宿泊や交通手段の手配、強化会場の手配、強化合宿等の準備から当日のお世話と非常に頑張ってくれ、選手や強化スタッフが活動しやすい環境を作ってくれました。特に、コロナ禍で行事の予定が中止や変更となる中で、その変更の手続きなど繁忙を極めました。時には、家庭での仕事を終えてから再度事務所に戻り業務をしてくれたこともありました。選手や強化スタッフの皆さんの頑張りは言うまでもありませんが、こうしたサポートがあっての強化活動だったと思っています。

② 競技部・総務部

競技部・総務部で一番苦労したのは、やはり、コロナの影響による対応でした。もともと、競技部・総務部が行う競技運営関係の仕事は、先催県の取り組み方を教えてもらい、それに倣って行えば概ね問題なくできると思っていました。その為、最初は先催県からの情報収集の業務が中心でした。

令和２年７月に三重県から、新型コロナウイルス感染防止対策（以下「コロナ対策」という。）を講じた競技運営を検討するよう指示があり、11月に三重県から「三重とこわか国体競技会における新型コロナウイルス感染防止ガイドライン」が発行されました。そこで、三剣連としてガイドラインに沿った形でのコロナ対策を検討し、12月にたたき台ができました。その後、全剣連に赴き対策案を協議し、令和３年１月に最終案を全剣連に承認頂きました。

作成したコロナ対策のポイントは三つあります。一つ目は、開始式・表彰式等の簡素化により大会時間を短縮して、コロナ感染リスクを減らすとともに、選手・チームスタッフや競技関係者の負担を軽減する。二つ目は、剣道競技はマスクをしての試合であり、選手の健康を最優先し、試合方法を変更する（延長を無くす）。三つ目は、会場内の密の状態を無くすために会場内の人数制限をする（入れ替えを含め）という内容です。

その結果、大会時間においては、先催県では試合終了は、１日目は19時半頃、２日目は18時半頃、３日目は14時半頃という状況でしたが、三重国体では、１日目、２日目共17時頃終了、３日目は13時半頃終了できる予定でした。

また、会場内の密を避けるための対応については、１階の試合場内の密を避ける対応と、２階の観客席の密を避ける対応があります。特に苦労したのが２階の観客席で、当初は、三重県内の観客のみにする方向で進めていましたが、伊賀市の意向もあり、県外観客を入れると共に、一般観客も入れることになりました。（コロナ対策の詳細内容はとこわか国体だより第３号をご参照ください。）

こうしたコロナ対策により、競技部・総務部の業務も繁忙を極めましたが、その縁の下の力持ちとなってくれたのが、事務局の玉置真紀さんでした。玉置さんは決定したコロナ対策に基づき各都道府県や三剣連内への具体的な案内文を作成し、タイムリーに対応してくれました。また、伊賀市とともに作成した県への提出書類やプログラム原稿などのチェックを行って頂き、間違いを的確に見つけだすチェックの神様として、伊賀市の担当者からも感謝の言葉を頂きました。

こうした競技部・総務部の課題を検討していくために、令和２年４月から夫々の部長（上山弘信・竹内邦勝）と私で、ＴＨＵ会議と称し打合せを行い、42回の会議を開きました。

ＴＨＵ会議・事務局のメンバー

コロナ対策を行う為、実行委員会の組織体制も変更せざるを得ず、令和３年２月に一応の体制が出来上がりました。しかし、４月の人事異動やコロナ関係で競技役員や補助員がたびたび変更となり、最終的に組織体制が固まったのは７月下旬でした。最終的に三剣連の競技役員103名、補助員51名、伊賀剣道連盟協力員11名という体制となりました。

いよいよ、このメンバーで国体に向けて始動すべく、８月24日には式典表彰関係のリハーサルを行う予定でいましたが、直前の８月21日、三重県知事の国体中止記者会見となりました。

【三剣連会員の皆様のご協力】

三重県での国体開催が決定し、その取り組みを行う上で、先立つものは資金でした。

平成25年３月の理事会・評議員会で、国体までの資金の積立計画として、会費の増額や昇段時の協力金等が決議され、平成25年４月から実施されました。

しかしながら、当初の必要経費の見誤り等もあり、更なる資金調達の必要性が出てきました。そこで、平成30年３月の理事会・評議員会において、更なる年会費の増額、寄付金募集・広告協賛活動を行う方向性が承認され、平成30年５月の理事会・評議員会にて寄付金・広告協賛活動が承認されました。広告協賛活動は５月から開始しましたが、寄付金活動は９月の各支部への説明会を経て開始されました。

その後、三剣連会員の皆様の積極的な活動のお陰で、令和３年８月に寄付金は目標額を達成することができました。また、広告協賛は、コロナ禍で多くの大会が中止となったため目標額には届きませんでしたが、多くの皆様にご協力を頂きました。

改めまして、ご寄付・ご協賛を頂いた皆様、そしてその活動に積極的に取り組んで頂いた会員の皆様にお礼を申し上げます。

【終わりに】

こうして、沢山の皆様のお陰で万全の準備ができ、国体開催まであと少しというところで中止が決定し、皆様の思いを成果に結びつけることが出来なかったことは、実行委員長として悔しく無念でなりません。

しかしながら、三剣連が一丸となって国体成功に向けて取組み、それなりの成果が見えるところまで漕ぎつけたことは、三剣連にとって大きな財産になったと思っています。私自身も、国体の準備活動を通じ、多くの人と知り合い沢山の勉強をさせて頂きました。

末筆ではございますが、国体準備活動にご協力いただいた三重県剣道連盟の役員・会員の皆様、国体総合優勝を目指して頑張って頂いた選手・監督・アドバイザーの船津先生・強化スタッフの皆様、競技運営を担当頂く予定だった競技役員の皆様、地元支部として協力いただいた伊賀剣道連盟の皆様、そして、国体の情報収集の為にお世話になった先催県剣道連盟の皆様、選手強化活動にご協力いただいた都道府県剣道連盟の皆様、色んな面でサポート頂いた三重県地域連携部国体・全国障害者スポーツ大会局の皆様、国体成功に向けて共に取り組んだ伊賀市企画振興部国体推進課の皆様、本当にありがとうございました。心からお礼を申し上げます。

国体寄付金・協賛金の結果

項目		目標額（千円）	ご賛同者数	実績額（千円）
寄付金		**12,000**		**12,000**
内訳	会員	6,000	747人	7,068
	剣道団体	2,600	88団体	1,795
	支部等	400	14支部	1,092
	企業等	3,000	77社	2,045
協賛金		**2,500**	**87社**	**721**

実績額：2021年８月31日現在